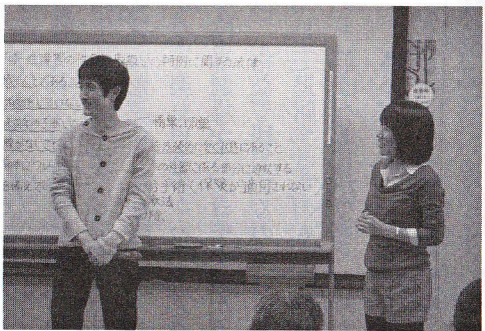


# 「震

「震」 災下キュメンタリー」というジャンルが確立・拡大しつつある。背景には東日本大震災が広域に、かつ原発事故などさまざまな「被害」の在り様もたらしたこと。もう一つはプロ以外で

も、一般市民の映像制作スキルが向上した現在、多様な視点から「3・11」を描く作品が生まれていることがある。そんな作品を観られるのが、ビデオアクト（<http://www.videoact.jp/>）で二カ月に一回、主に東京・飯田橋で

開かれる上映会だ。一月二九日は「何が災害弱者をつくるのか」という標題で、『震災から1年 被災地いわきからのメッセージ』（島田暁監督）と『音のない3・11』（被災地にろう者もいた）（今村彩子監督）を上映した。



作品の上映後、会場からの質疑に答える島田暁さん（左）と今村彩子さん。（撮影／筆者）

前者は福島で被災した性同一性障害（GID）の人々の現状を、GIDではないが同性愛者を公言する島田さん（[https://twitter.com/Akira\\_Shimada](https://twitter.com/Akira_Shimada)）が追った作品。GIDであるがゆえに、被災地で自衛隊が設けた男女別の風呂に入れなかった、それ以前に「戸籍」の問題で就職や住居探しが難しかったGID者が震災と原発事故後の混乱の中で直面した困難が語られる。

今村さん（<http://studioaya.com/>）は名古屋在住だが自身もろう者。震災発生から一日後に宮城県に入り、知り合ったろう者で高齢の女性のもとに一年半通って取材した。震災当日、ろう者は「津波警報」を伝える放送も防災無線も聞こえず、結果的に東北三県

で七五人が犠牲になったという。今村さん自身、撮影取材中に震度六の余震に遭遇。揺れが収まって安心していたら、同行者に「津波警報が出た！」と知らされ、あわてて避難する場面も。「やっぱり聞こえないって怖いな」と、地元のろう者が震災で直面した状況や心境を実感した、と語る。

「言葉の壁がある在日外国人のかたにも同じ問題がある」と感じた今村さんは、英語や韓国語、ポルトガル語などの字幕を今回の作品につけ、来年二月にDVDで発売する。そのうえで、やはり今後も継続的に現地へと取材に向かうそうだ。「3・11は風化した」などと言われる昨今だが、こうした「震災下キュメンタリー」は今後ますます重要かつ充実、目が離せない。

ちなみに島田さんはGID学会の依頼で今回の作品を制作し、同学会の各支部でも上映されたが、今後も取材を続けて長編を制作するという。

## 草の根 www.M

第141回

# GIDや聴覚障害者 など多様な「3・11」 を市民らが次々制作

岩本太郎

「言葉の壁がある在日外国人のかたにも同じ問題がある」と感じた今村さんは、英語や韓国語、ポルトガル語などの字幕を今回の作品につけ、来年二月にDVDで発売する。そのうえで、やはり今後も継続的に現地へと取材に向かうそうだ。「3・11は風化した」などと言われる昨今だが、こうした「震災下キュメンタリー」は今後ますます重要かつ充実、目が離せない。

いわもと たろう・ライター。ブログは <http://air.ap.teacup.com/faroiimo/>